

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第237集

長土呂遺跡群

# 下聖端遺跡Ⅴ

長野県佐久市長土呂 下聖端遺跡Ⅴ発掘調査報告書

2016.03

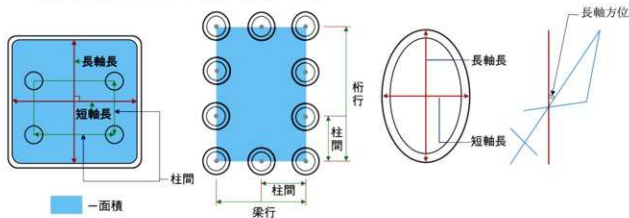
佐久市教育委員会

## 例 言

- 1.本書は佐久市が行う斎場関係道路整備事業1-6号線改良工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2.調査原因者 佐久市 建設部（土木課）
- 3.調査主体者 佐久市教育委員会
- 4.調査地点 佐久市長土呂512 外
- 5.遺跡名及び期間と面積 下聖端遺跡V（NSKV） 277㎡  
平成27年 8月24日～9月25日（現場作業）  
平成27年 9月28日～平成28年 3月31日（整理作業）
- 6.発掘・整理担当者 富沢一明
- 7.本書に掲載した出土遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1.遺構の略記号は竪穴住居址-H、特殊遺構-T、掘立柱建物址-F、土坑-D、溝状遺構-M、ピット-Pである。
- 2.挿図の縮尺は遺構1/80、遺物で土器・石器1/4、金属製品1/2を基本とする。それ以外のものは挿図中にスケールを記載した。
- 3.遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記した。
- 4.土層の色調は1988年版「新版 標準土色粘」に基づいた。
- 5.遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。（ ）は推定値、< >は残存値である。
- 6.測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
- 7.遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



住居・竪穴建物址

掘立柱建物址

土 坑

長軸方位

- ・遺構計測表中の（ ）は推定値、< >は残存値。数値単位はmと㎡であり、その他は表中に記載した。
- ・遺構深度は数値の範囲を示しているもの以外は平均値である。
- ・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が1割を超えたものを長方形とした。
- ・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

- 8.挿図中における網掛けは以下を示す。



地山



黒色処理  
磨り面  
粘土



柱痕



灰軸陶器



貼床



焼土



須臾器断面

## 目次

例言・凡例			
第Ⅰ章 発掘調査の経緯			
第1節	調査の経緯	1	
第2節	調査体制	2	
第3節	調査日誌	2	
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境			
第1節	自然的環境	3	
第2節	歴史的環境	4	
第Ⅲ章 調査の方法			
第1節	調査の方法	7	
第2節	基本層序	9	
第3節	検出遺構・遺物の概要	9	
第Ⅳ章 調査の成果			
第1節	竪穴住居址		
(1)	H1号住居址	10	
(2)	H2号住居址	11	
(3)	H3号住居址	12	
(4)	H5号住居址	15	
(5)	H6号住居址	16	
第2節	特殊遺構		
(1)	T1号特殊遺構	16	
第3節	掘立柱建物址		
(1)	F1号掘立柱建物址	17	
第4節	土坑		
(1)	D1号土坑	17	
(2)	D2号土坑	17	
(3)	D3号土坑	17	
第5節	溝状遺構		
(1)	M1号溝状遺構	18	
(2)	M2号溝状遺構	20	
(3)	M3号溝状遺構	20	
(4)	M4号溝状遺構	20	
第6節	単独ピット	20	
第Ⅴ章 調査のまとめ			23
図版			
遺構図版			
遺物図版			



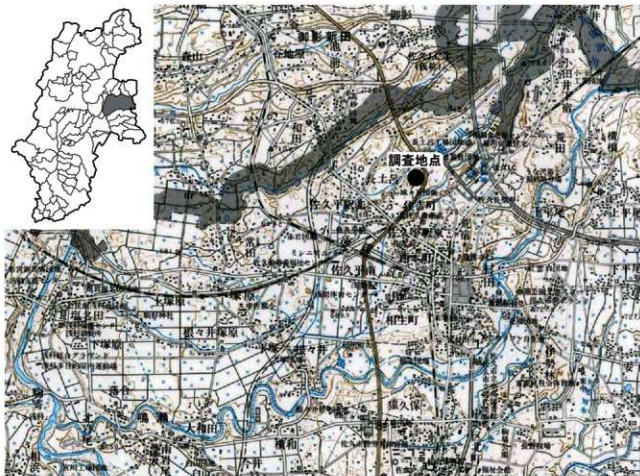
調査区を南側から望む。南側の4車線道路は国道141号

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 調査の経緯

今回調査を行った下型端遺跡Vは長土呂遺跡群の中央部分に所在し、標高 720mを僅かに越える台地東端に位置する。調査地点の地形は北から南へとのびるいわゆる「田切」に挟まれた台地で、この台地の幅は調査地点付近で 250mを測る。遺跡周辺では当台地上で業務流通団地建設の折、約 10 万㎡の発掘調査がなされた聖原遺跡が存在する。聖原遺跡からは古墳時代後期から平安時代の集落跡が検出され、堅穴住居址 900 軒、掘立柱建物址 800 棟が確認された。出土遺物も多彩で、八咫鏡や馬鈴、六種類の皇朝十二銭、帯金具、石製印「伯万私印」などがあり、特に注目される遺物として、古代甲斐国の郡名を暗文で記した仏鉢甲斐型土器が住居内より出土した。また、当遺跡に隣接する国道 141 号建設の折調査された下芝宮遺跡・上大林遺跡・下型端遺跡等からは、佐久地域では希少な古墳時代中期後葉の集落跡が発見され、籠目瓦痕土器や 5 世紀代の須恵器が出土した。

今回、長土呂地区に建設された畜場周辺整備の一環として市道の改良が計画され、平成 27 年 3 月に佐久市建設部土木課より文化財保護法 94 条が佐久市教育委員会に通知され、当該地の試掘調査が行われた。結果、予定地内から遺構が発見され、工事による遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなり、佐久市文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 下型端遺跡V位置図 (1/50000)

## 第2節 調査体制

平成27年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	榑澤 晴樹						
事務局	社会教育部長	山浦 俊彦							
	文化振興課長	小林 聖							
	企画幹	三石 建							
	文化財調査係長	大塚 広樹							
	文化財調査係	小林 眞寿	富沢 一明	上原 学	神津 一明	生島 修平			

調査担当	富沢 一明								
調査員	赤羽根 篤	赤羽根充江	飯森 成英	磯貝 律子	岩崎 重子				
	加藤ひろ美	木内 修一	小林 妙子	土屋 邦子	中澤 登				
	羽毛田利明	林 まゆみ							

## 第3節 調査日誌

平成27年

3月13日	佐久市より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（保護法94条第1項）
3月23日	長野県教育委員会教育長より26教文第8-326号にて通知。
6月8日・7月17日	市教育委員会文化振興課により試掘調査
8月5日	土木課より埋蔵文化財発掘調査の実施についての依頼。
8月24日	長土呂遺跡群 下聖端遺跡Vとして発掘調査開始。
9月25日	発掘調査終了 整理作業開始
12月20日	報告書原稿を入稿する。
平成28年度	
3月31日	報告書を刊行しすべての作業を終了する。



重機による表土剥ぎ



基準点設定風景



調査風景

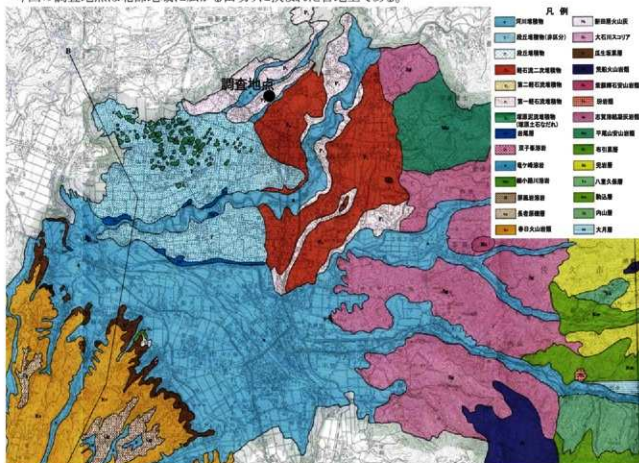
## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 自然的環境

佐久地域は、周辺を山地や台地に囲まれた盆地状を呈する。標高は700m前後であり、夏涼しく、冬寒い高原性の気候を特徴とする。北には現在も噴煙を上げる浅間山が聳え、南には蓼科連峰が東西に連なる。東は関東山地が南北に連なり、群馬県との境をなしている。西には隆起地形である御牧原・八重原台地が広がっている。佐久盆地の中央には甲武信岳の山麓に水源を持つ千曲川が蓼科連峰や関東山地から流れ出た中小河川を集めて北流している。

このように、佐久盆地は周囲を山々に囲まれ幾多の河川に潤された大地が広がるが、地質学的にみると南北に大きく二分することができる。境界は関東山地より流れ出て、盆地のほぼ中央を西に流れる滑津川付近であり、滑津川と千曲川が合流する付近では北部地域との比高差は20m内外を示す。ここを境として北部地域は浅間山から広がる山麓が緩やかに傾斜する地形で、浅間山の噴火によって堆積した火砕流や火山灰により形成された台地が広がっている。この台地は雨水等の浸食に弱く、浅間山の麓から放射状に幾筋ものいわゆる「田切り」と呼ばれる谷が伸び、切り立った崖により台地を細長く分断している。これとは対照的に、南部地域は千曲川の氾濫原とする沖積地や滑津川や志賀川といった中小河川により形成された谷口扇状地が広がっている。このため、地表下は河床礫層と沖積粘土層が広がり、現在では佐久地域の穀倉地帯となっている。

今回の調査地点は北部地域に広がる田切りに挟まれた台地上である。



第2図 佐久市地質図 (佐久市志 自然編より 一部改編)

## 第2節 歴史的環境

今回調査した長土呂遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに付随する開発等で1980年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。本遺跡に隣接する近津遺跡群からは縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は発見されていない。本調査地点でも、縄文時代中期・後期の土器片及び落と穴状の土坑は検出されたが、住居址は検出されなかった。縄文期の集落が発見されるのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側であり、縄文時代に佐久平中心部の平坦地は主に狩場として利用されていたと考えられる。

次に弥生時代では、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少なく、集落も発見されていない。仲田遺跡の土坑より緑二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑より水ⅡⅡに比定される細首条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡Ⅱからは包含層からの出土であるが、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。これらの遺跡はいずれも湯川沿いに立地する遺跡であり、佐久北部においては弥生前期の人々が湯川を意識して活動していたことが解る。次に中期になると遺跡数も増え集落址が確認されるようになる。湯川沿いの下流より、川原端遺跡・森平遺跡・寄塚遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相に位置づけられるのは根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても遺跡立地は湯川沿岸を指向する傾向にあり、佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の生産或いは流通・移動等の諸々の活動において重要な要素を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該期の遺跡からは遺構として西近津遺跡より国内で最大級なる18×9.5mの堅穴住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋塹という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者顔面に装着された状態で銅剣15本が発見されている。

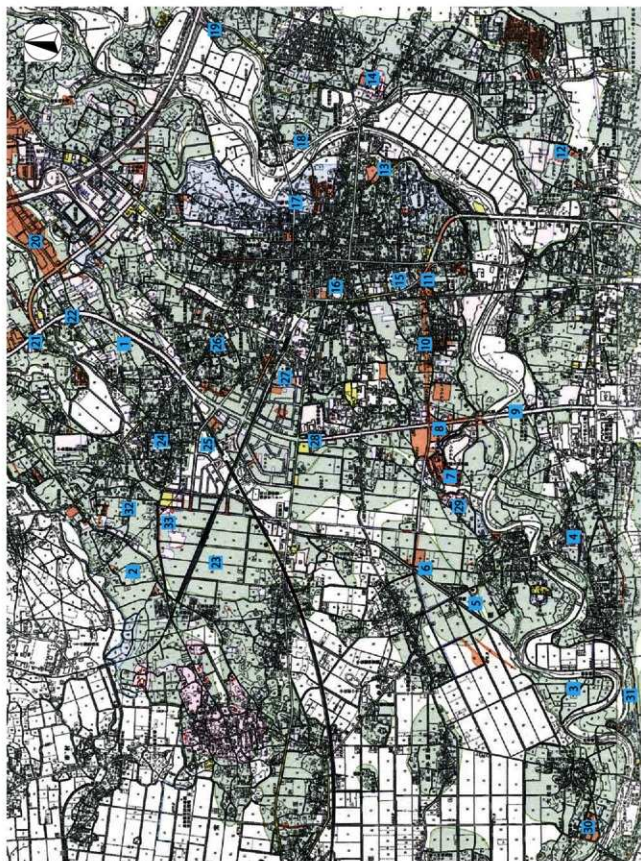
次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上聖端遺跡・芝宮遺跡・原元遺跡といった遺跡では累積で100軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落選地の理由が大きく変わった。或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居数は増すが、住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に周防畑遺跡群付近の調査事例で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代「大井郷」の核地域であろうことが推測されている。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に上着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚載』によれば「その賑わい国府にまさり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑池の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。





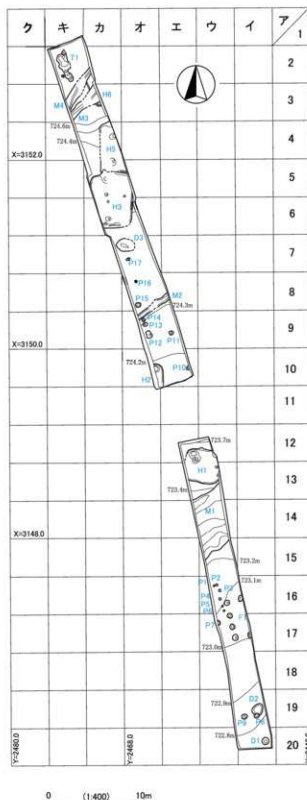
第3図 周辺遺跡位置図



第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	長土呂遺跡群	下室端遺跡V	長土呂		本報告書
2	近津遺跡群	長土呂宇西近津・森下		竪穴住605(縄文～平安)、掘立80、土坑3、周溝墓13	県調査
3	森平遺跡	横和字森平		竪穴住(弥生中期11)、周溝墓1、礎礎、溝3、配石遺構2	県調査
4	宮の上遺跡群	根々井芝宮遺跡	根々井芝宮	竪穴住(弥生43・古墳3・平安14)、掘立3、土坑27、溝5	第99集
5	根々井大塚古墳	根々井字大塚		方形埴土墓1	年報9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	竪穴住(弥生後期11)、周溝墓1、礎礎、土坑7、溝6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西/久保	竪穴住(弥生中期9・弥生後期38・古墳中期20)	
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡III・IV	岩村田字西一本柳	竪穴住201(弥生～平安)、掘立45、土坑12、溝11	第73集
		西一本柳遺跡VII	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期7・後期2・古墳後期6・奈良1)、掘立5、土坑8、溝6	年報8
		西一本柳遺跡VIII	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期9・弥生後期7・古墳中期6・古墳後期42・奈良16・平安9・不明2)、掘立30、土坑51、溝13	第109集
		西一本柳遺跡IX	岩村田字西一本柳	竪穴住(古墳後期16・奈良1・平安2・竪穴状2)、掘立9、土坑12	第113集
		西一本柳遺跡X	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期34・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、掘立14、土坑19、溝14	年報14
		西一本柳遺跡XI	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期1・弥生後期1)、溝	年報13
		西一本柳遺跡XII	岩村田字下樋田	竪穴住(古墳後期5・奈良1・竪穴状遺構6)、掘立2	第125集
		西一本柳遺跡XIII	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期13・弥生後期8・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、掘立5	第139集
		西一本柳遺跡XIV	岩村田字上樋田	竪穴住(弥生中期17・後期17・古墳中期3・後期7・奈良11)、掘立10、土坑16、溝13	第175集
		西一本柳遺跡XV	岩村田字常木上	竪穴住(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈良5)、掘立3、土坑5	第154集
西一本柳遺跡XVI	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期12・後期1・古墳後期4・奈良1)、掘立6、溝3	第160集		
西一本柳遺跡XVII	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期1・後期2・奈良2)、溝	第169集		
9	寺畑遺跡群	仲田遺跡	篠久保字仲田	竪穴住(古墳中期4・後期6・奈良10・平安6)、掘立11、土坑6、H15より花卉双蝶八花鏡出土	第66集
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡II	岩村田字北一本	竪穴住4、土壇墓1、溝2	年報14
		北一本柳遺跡III	岩村田字北一本	竪穴住(弥生後期48・古墳後期11・中世57)、掘立13、土坑310、溝32	第175集
		北一本柳遺跡IV	岩村田字北一本	竪穴住3、溝2	第158集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡II	岩村田字東大門先	竪穴住(古墳後期2・奈良・平安15)、掘立21、土坑9、溝10	第175集
12	野馬窪遺跡群	野馬窪遺跡II・III	篠久保字野馬窪	竪穴住1、竪穴状遺構17、掘立13、土坑234	第170集
13	下信濃石遺跡	岩村田字仁王前		寺院関連1、竪穴状遺構10、土坑47 古瀬戸灰釉水鏡出土	第134集
14	蛇塚古墳	安原字蛇塚		後期古墳3基、竪穴住3、掘立1	第78集
15	岩村田遺跡群	響音堂遺跡	岩村田字響音堂	竪穴住(平安1・中世27)、土坑170、土壇墓4、掘立1	第70集
16	岩村田遺跡群	柳堂遺跡	岩村田字柳堂	竪穴住(弥生後期2・平安1・中世33)、掘立2、土坑203、周溝墓3、池	第85集
17		大井城址	岩村田字古城	竪穴住(古墳後期15・中世54)、掘立3、土坑285	
18		下小平遺跡	岩村田字下小平	竪穴住(弥生後期5・古墳後期1)、方形周溝墓2	
19		櫻巻遺跡	上平尾字櫻巻	竪穴住(弥生後期1・古墳前期・平安2)、溝4	
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂字聖原	竪穴住(古墳後期155・奈良・平安663)、掘立869、土坑370、溝40	第103集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡I～IV	長土呂字下芝宮	竪穴住(古墳中期5・後期2・平安2)、掘立6	第9集
22	長土呂遺跡群	下上室端遺跡I・II	長土呂字下室端	竪穴住(弥生後期4・古墳中期13・後期25・奈良1・平安16)、掘立18	第9集
23	岡野塚遺跡群	長土呂		竪穴住92(弥生～平安)、掘立9、円形周溝墓15、土坑422	県調査
24	長土呂遺跡群	長土呂館址	長土呂	中世館址	
25	長土呂遺跡群	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	竪穴住(弥生後期末9)、溝、銅鏡	第110集
26	槌坂坂遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	竪穴住(弥生後期2)、銅鏡11	年報5
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡I	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生中期2・弥生後期1・古墳後期2・平安2)、掘立1、古墳1、土坑8	第53集
		円正坊遺跡II	岩村田字円正坊	竪穴住(古墳中期7・後期23・平安4)、方形・円形周溝墓10	第102集
		円正坊遺跡VI	岩村田字円正坊	竪穴住37、掘立4、壺棺墓1、土坑26	年報15
		円正坊遺跡VII	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生～平安41)、掘立2、土坑11、溝3、円形周溝墓1	第185集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡I・II	岩村田字松の木	竪穴住(弥生～古墳10)、掘立1、土坑1、溝6	第91集
29	鳴沢遺跡群	根々井字五里田		竪穴住(弥生中期43)、周溝墓5、古墳址2、土坑37	第74集
30	大和田遺跡群	川原端遺跡	鳴瀬川原端	竪穴住(弥生中～後期13・古墳49)、掘立20、土坑22、溝24	第89集
31	書塚遺跡群	書塚遺跡	横和字書塚	竪穴住13(弥生中期後半・古墳前期)、掘立26、土坑17	第157集
32	岡野塚遺跡群	宮の前遺跡I・II他	長土呂字宮の前	竪穴住187(弥生後期～平安)、掘立59、土坑183	第198集
33	長土呂遺跡群	大豆田遺跡IV	長土呂	竪穴住26(弥生後期～平安)、竪穴3、掘立33、土坑139、溝76	第229集





第5図 下聖端遺跡V全体図

#### 遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構No.で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

#### 遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

#### 写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

#### 遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り取蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正し、仮図版を作成した。遺物は1/1で実測し、1/2で仮図版を作成した。

#### 報告書

文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

## 第2節 基本層序

本調査区の土層は基本的にI～V層に分層される。III層の砂やシルトを含む灰黄褐色土は調査区中央から北側にかけて堆積が確認でき、IV層の黒褐色土は調査区南端では堆積が確認できず、I層の表土下はV層ローム層となった。

遺構確認面は時期ごとに異なり、古墳時代の遺構はIV層上面で確認され、平安時代の遺構はIII層上面より掘り込みが確認できた。

このことは周辺の試掘調査成果でも確認されており、遺跡周辺に堆積が確認できるIII層は平安時代以前に形成された層であることが解る。

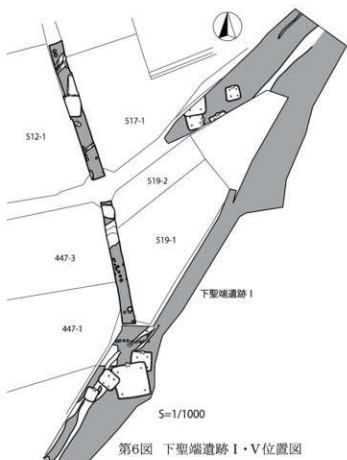
I層 10YR7/2 にぶい黄褐色土  
表土

II層 10YR5/2 灰黄褐色土

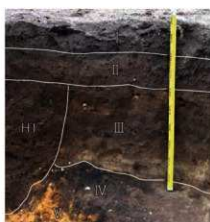
III層 10YR4/2 灰黄褐色土  
砂や褐色シルトを含む

IV層 10YR3/1 黒褐色土  
しまり・粘質がある

V層 10YR6/8 明黄褐色土  
ローム層(P1)



第6図 下聖蹟遺跡I・V位置図



## 第3節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構	竪穴住居址	5軒(古墳時代中期・平安時代)	特殊遺構	1基	掘立柱建物址	1棟
	溝状遺構	4本	土坑	3基	単独ピット	

遺物 縄文土器(中期)、石器類(石鏃・蔽き石)土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(鉄鏃・釘)

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 竪穴住居址

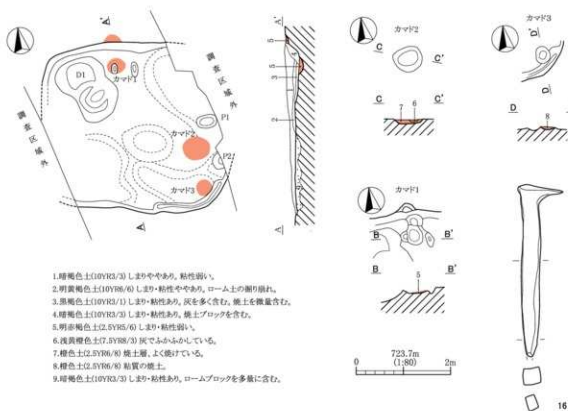
#### (1) H1号住居址

本址は調査区中央のウ-12・13、エ-12・13Grで検出された。形態は方形と考えられるが東西側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長4.21m・短軸が東西で3.30mである。床面積は推定で12.2㎡を測る。壁深さは北西コーナーで最大0.21mを測る。住居主軸方位はほぼNを示す。床は全体に硬質で、特にカマド前面と住居中央部は顕著であった。

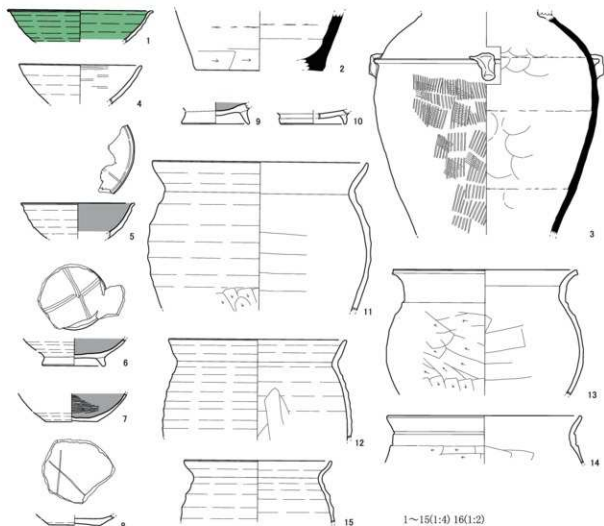
カマドは住居址北壁に検出された。形態は煙道がわずかに住居壁より飛び出すタイプで、袖等は確認されなかったが、火床部と掘方は確認できた。また、本址からは住居南東コーナー部分で火床部のようなよく焼けた焼土範囲が2箇所確認された。いずれも掘り込みをもつもので、或いは住居南東コーナーに構築されるカマドの痕跡の可能性がある。本址からはピットが2か所検出された。規模はP1が径0.4m・深さ0.1m、P2が径0.3m・深さ0.1mを測る。また、床下より土坑状の掘り込みが検出され、規模は長軸1.4m、短軸1.04m、深さ0.59mを測る。

本址からの出土遺物は覆土を中心に多くあった。16点を図示した。1と10は灰軸陶器碗の口縁部と高台部の破片である。1の軸は刷毛掛けである。2と3は須恵器壺の破片で同一個体と考えられるが接合関係はない。いわゆる「凸帯文付四耳壺」である。外面は叩き目が残り、内面はナデが施されている。4～9は土師器碗と坏である。内面を黒色処理したものと、しないものがある。また、ミガキだけのものと、ミガキによる暗文が施されたものがある。8は内面に焼成後のヘラ記号「×」が施されている。11～15は土師器甕で、11・12・15はいわゆる「ロクロ甕」、13・14は「武蔵甕」の範疇としてとらえられる。16は鉄製品の角釘と考えられるが、覆土上層からの出土であり、本址に伴わない可能性がある。

これらの出土遺物から、本址は9世紀後半から10世紀前半に位置づけられると考える。



第7図 H1号住居址及び出土遺物実測図

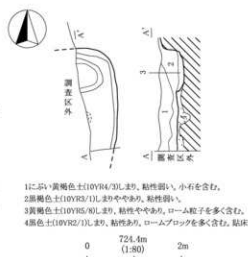


第8図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は調査区中央のエ-10、オ-10Grで検出された。形態は方形と考えられるが南側と西側のほとんどが調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長1.9m・短軸が東西で0.6mである。床面積は検出部分で1.2㎡を測る。壁深さは北側で最大0.37mを測る。住居主軸方位は推定でN-8.5°-Wを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。検出された部分にはカマドや柱穴は無かったが、北側で土坑状の浅い掘り込みが検出され、掘方段階にピットが検出された。

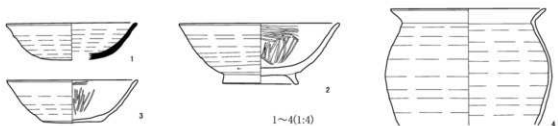
本址からの出土遺物は少量であったが、4点を図示した。1は須恵器坏、2は土師器碗、3は土師器坏、4は土師器口ロコ甕である。これらから本址は9世紀後半の所産と考えられる。



- 1に黄褐色土(10YR4/3)L.まじり、粘性弱い、小石を含む。  
 2黒褐色土(10YR3/1)L.まじりや多い、粘性弱い。  
 3黄褐色土(10YR5/8)L.まじり、粘性ややあり、ローム粒子を多く含む。  
 4黒褐色土(10YR2/1)L.まじり、粘性あり、ロームブロックを多く含む。貼床

第9図 H2号住居址実測図

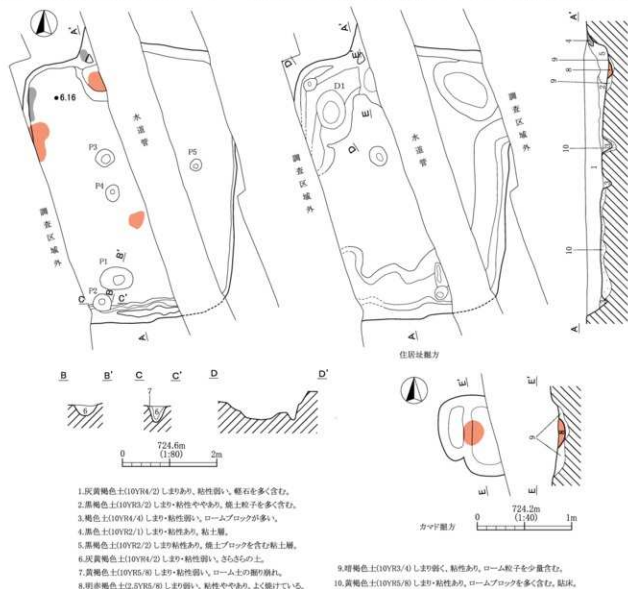




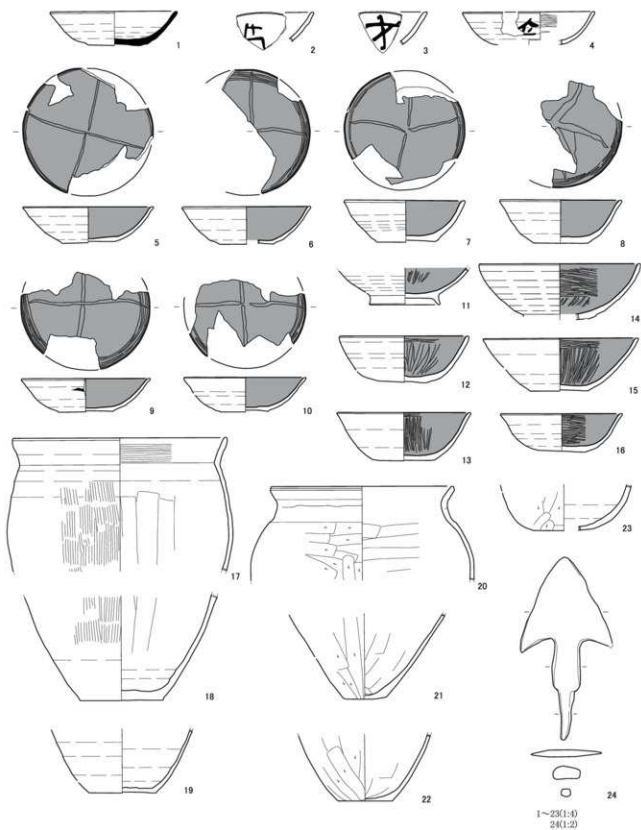
第10図 H2号住居址出土遺物実測図

(3) H3号住居址

本址は調査区中央北よりのオ-5・6、カ-5・6Grで検出された。形態は長方形と考えられるが北東コーナーと南西コーナーが調査区外となる。規模は、南北長が5.1m、東西長が4.3mを測る。床面積は推定部分も含め21.7㎡を測る。壁深さは北西コーナーで最大0.31mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、南が顕著である。



第11図 H3号住居址実測図



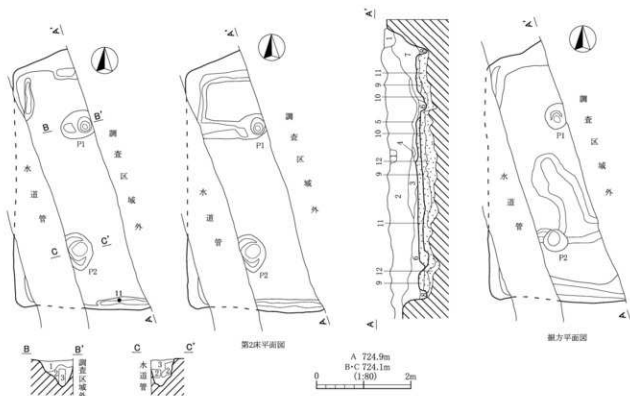
第12图 H3号住居址出土遗物实测图

住居主軸方位はN-3°-Eを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。南壁中央には壁溝が巡る。ピットは5か所検出され、各ピットの規模はP1が径0.6m・深さ0.31m、P2が径0.38m・深さ0.63m、P3が径0.4m・深さ0.18m、P4が径0.36m・深さ0.21m、P5が径0.38m・深さ0.29mを測る。本址の掘方は南壁と東壁が一段深く掘り込まれている。また、北西コーナーには円形の土坑状の掘り込みが確認され、H1号住居址と同じ様相を示している。

カマドは住居址北壁西よりで検出された。中央部を下水道管により削平されており、詳細は不明であるが煙道部と火床部の一部が検出された。形態は煙道が住居址壁よりも飛び出すタイプであり、一部に粘土を構築土として使用していた。礫等は確認されなかった。また、住居西側壁よりから焼土と粘土塊が確認された。

本址からの遺物は覆土からの出土が多かったが、24点を図示した。1は須恵器杯である。南壁よりの床面上から出土した。底部は回転糸切り離しである。2～4は土師器の坏片である。いずれも体部表面に墨書が確認できるが、欠損部もあるため判読の確定はできないが、3は「才」、4は「介一」の可能性がある。5～16は内面黒色処理を施した土師器杯か碗である。また、5～10は内面見込み部にミガキによる「×」印の暗文が施されている。17～23は土師器甕である。17と18は同一個体と考えられる。ロクロ成形の後に刷毛目の残るナデが行われている。19と23は「ロクロ甕」、20～22は「武蔵甕」である。24は短頸の鉄鍔である。ほぼ完形で西壁よりの覆土中から出土している。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半から10世紀前半の構築に位置づけられると考える。



1. 灰白色土(10YR7/1)しまり・粘性弱い、砂主体。
2. 黒褐色土(10YR3/1)しまりややあり、粘性あり、軽石を多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり、軽石を少量含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性ややあり、軽土粒子を多く含む。
5. 黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり、炭化物を多く含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性ややあり、軽石を含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまりややあり、粘性弱い、軽石を多く含む、ローム粒子を含む。
8. にぶい黄褐色土(10YR6/3)しまり・粘性弱い、ローム層崩れ。
- (第1貼床) 9. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性あり、上面硬質、ロームブロックを多く含む。
- (第2貼床) 10. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性あり、上面硬質、ピンクのローム粒子を多く含む。
11. にぶい黄褐色土(10YR6/4)しまり・粘性弱い、黒色土ブロックを多く含む。
12. 浅黄褐色土(10YR8/3)しまり弱く、粘性強い、ロームと主体で黒色土ブロック含む。

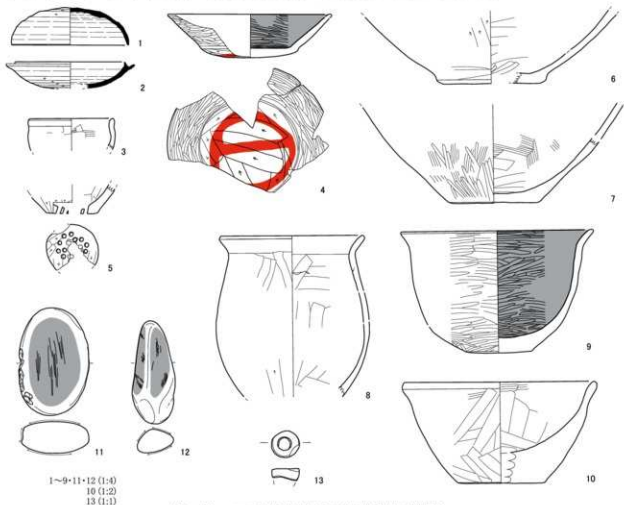
第13図 H5号住居址実測図

#### (4) H5号住居址

本址は調査区北よりのオ-5、カ-4・5Grで検出された。形態は方形と考えられるが東側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が西壁で検出長4.82m・短軸が南壁で検出長2.80mである。床面積は検出部分で8.9㎡を測る。壁深さは最大で1.35mを測る。住居主軸方位は推定でN-17°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。特に、貼床は張替が確認され、第二床として捉えた部分では柱穴と西壁を結ぶ間仕切り溝も検出された。壁溝は南壁と西壁の一部に巡っていた。ピットは主柱穴と考えられる2か所が確認できた。各ピットの規模はP1が径0.6m・深さ0.6m、P2が径0.8m・深さ0.6mを測る。柱間の距離は2.5mを測る。

本址からの出土遺物は覆土からのものが多かった。図示できたものは13点である。1と2は須恵器の坏身と蓋である。いずれも欠損はしているが蓋身セットとして捉えられる。陶邑編年のTK43平行に比定可能か。3は小型の土師器鉢で、底は欠損するが丸底になるタイプと考えられる。4は土師器坏で底部へラ削り、体部内外面を丁寧にミガキを施している。また、内面は黒色処理、底部外面には記号状の赤彩が確認できる。この類別としては長土呂遺跡群聖原遺跡から、同じく古墳時代後期の坏に記号と考えられる赤彩された模様を確認できるものがある。5は多孔の甗である。孔はいずれも焼成前のものである。6と7は壺の底部である。7は丁寧にミガキが施されている。8は土師器甕で、いわゆる「胴張甕」と呼ばれる最大径を胴部下半に有するタイプの甕である。9は内面黒色処理された土師器鉢である。10はミニチュア土器の鉢と考えられる。11は側面に叩き痕が残る叩き石、12は磨り石である。13は小型の白玉で覆土中から出土した。

本址は、これらからの出土遺物から古墳時代後期・6世紀後半に位置づけられる。

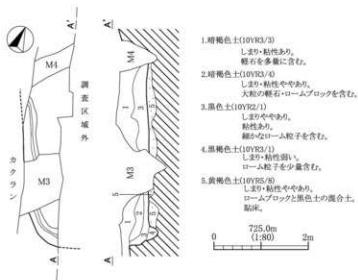


第14図 H5号住居址及び出土遺物実測図

### (5) H6号住居址

本址は調査区北端のカ-2・3Grで検出された。形態は方形と考えられるが東側が調査区外となり不明である。また、北壁はM4号溝状遺構によって削平されている。床面積は検出部分で1.7㎡を測る。壁深さは西壁で最大0.46mを測る。主軸方位は推定でN-25°-Eを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。検出された壁部分には壁溝が巡っていた。

本址からの出土遺物は少量で図示できるものは無かったが、古墳時代中期の土師器塚の口縁部が覆土中より出土している。これらから不確実ではあるが本址は古墳時代中期の所産と考えられる。



第15図 H6号住居址実測図

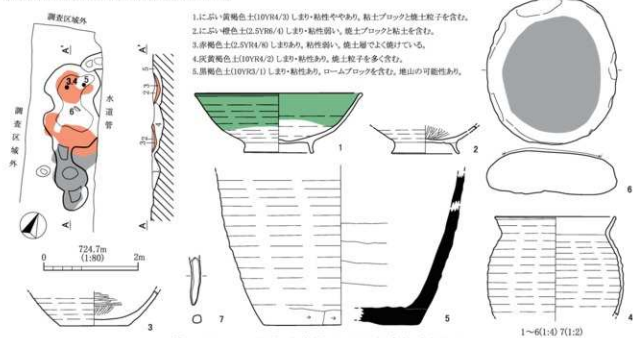
## 第2節 特殊遺構

### (1) T1号特殊遺構

本址は調査区北端のキ-2Grで検出された。形態は不整形で、南北に長軸を持つ。規模は、南北の長軸が3.15m・短軸が東西で1.18mである。深さは最大0.26mを測る。土坑状の掘り込みは、緩やかな碗状の掘り込みで、2か所に顕著な焼土範囲が確認できた。この焼土はよく焼けており、周辺部も比熱していることから、この場での燃焼が考えられる。また、焼土の南側には薄く粘土が広がっていた。

本址からの出土遺物は焼土に混ざって多く出土し、H3号住居址と接合関係が確認されたものが多い。1は灰赤陶器碗であり、軸は刷毛めりである。2は土師器碗、3は土師器杯である。4は小型の土師器口ろ甕、5は須恵器甕の底部である。6は叩き石で、7は釘状の鉄製品である。

本址はH3号住居址の出土遺物と接合関係にあり、住居址との距離などを考慮すると、H3号住居址に伴う屋外炉的な性格の遺構と捉えられる。



第16図 T1号特殊遺構及び出土遺物実測図





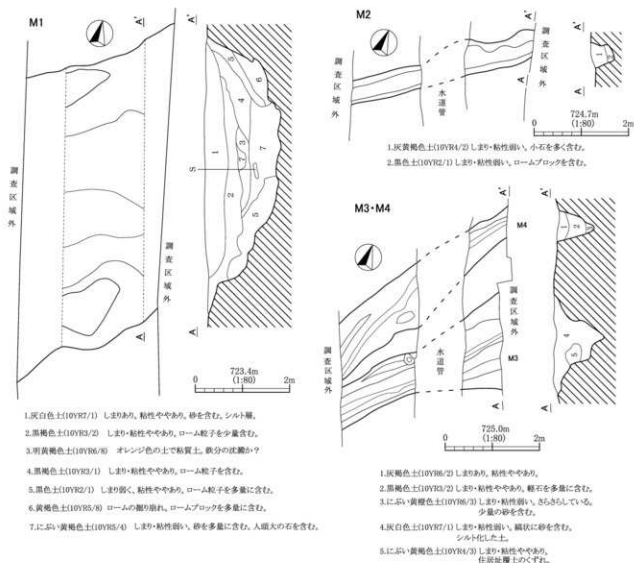
## 第5節 溝状遺構

### (1) M1号溝状遺構

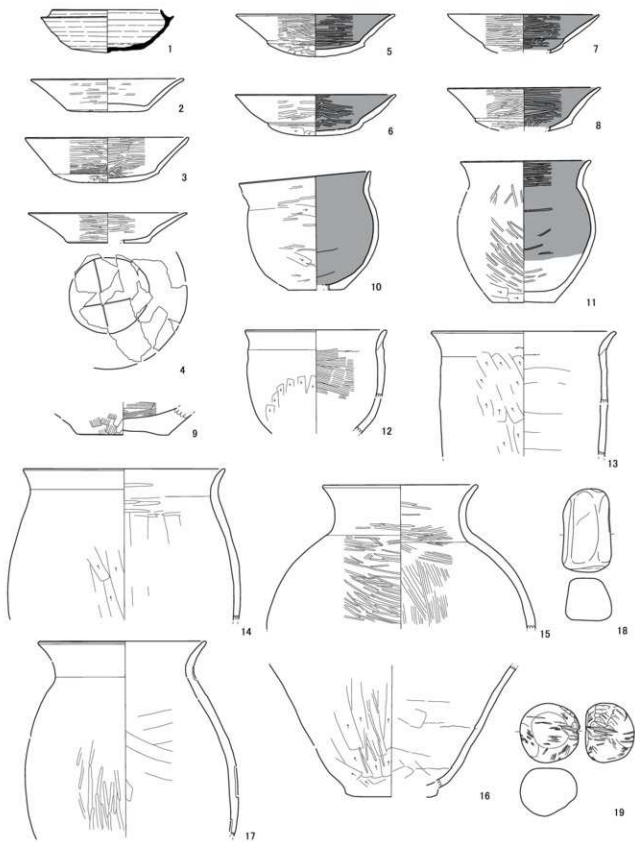
本址は調査区中央部のウー13～15、エー14Grで検出された。東西方向に延びる溝状遺構で、規模は幅5.38m、深さ1.47mを測る。溝壁の立ち上がりは、北側に比べ南側が緩やかである。底面は凹凸があり、一部には水が流れたような痕跡があった。覆土は自然堆積であったが、図に示した7層は流水により形成されたと考えられる砂層が堆積しており、断続的な流水作用により溝が埋没していった状態を示していた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特に溝底面の第7層からまとまって出土した。出土した土器類は、接合作業の結果、完形となったものは少なかったが、摩耗等はあまり見られず、溝状遺構への流れ込みというよりは一括廃棄のような状況であった。図示したものは19点である。1は須恵器身の部分である。陶色編年のTK43平行ぐらいに比定可能か。2～8は土師器坏である。いずれの坏も体部から口縁部が大きく外反するタイプのもので聖原遺跡分類の「坏H」に対応される。5～8は内面黒色処理が施されている。4は底部に焼成前のヘラ記号「×」が施されている。10～17は土師器甕である。10と11は内面黒色処理が施されている。18は磨り石。19は軽石製で、面取りも行われているが、深い切り込み状の凹もあり浮きの可能性もある。

これらの出土遺物は6世紀後半に位置づけられ、本址の形成も古墳時代頃と考えられる。



第19図 M1～4号溝状遺構実測図



第20图 M1号沟状遗构出土遗物实测图

1~19:1:0

## (2) M2号溝状遺構

本址は調査区中央部のエー8、オー8・9Grで検出された。東西方向に延びる溝状遺構で、規模は検出部分で3.98m、幅0.70m、深さ0.34mを測る。溝壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積で黒色土を主体とし、砂等は含まれていなかった。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から土師器甕4片、土師器坏3片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

## (3) M3号溝状遺構

本址は調査区北側のキー3、カー3Grで検出された。北東から南西方向に延びる溝状遺構で、規模は検出部分で3.82m、幅1.60m、深さ1.00mを測る。溝壁の立ち上がりは緩やかに立ち上がり、溝底面は非常に幅狭く、いわゆる「V」字状を呈する。覆土は自然堆積であるが下層に砂を非常に多く含み、溝底面は流水の痕跡が確認できた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から古墳時代中期の土師器高坏脚の破片と土師器甕片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

## (4) M4号溝状遺構

本址は調査区北側のキー3、カー2Grで検出された。北東から南西方向に延びる溝状遺構で、調査区西側でM3号溝状遺構と交差すると思われる。規模は検出部分で4.42m、幅1.12m、深さ0.70mを測る。溝壁の立ち上がりは緩やかに立ち上がり、溝底面は非常に幅狭く、いわゆる「V」字状を呈する。覆土は自然堆積であり、M3号溝状遺構と異なり砂は含まれていない。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から土師器甕4片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

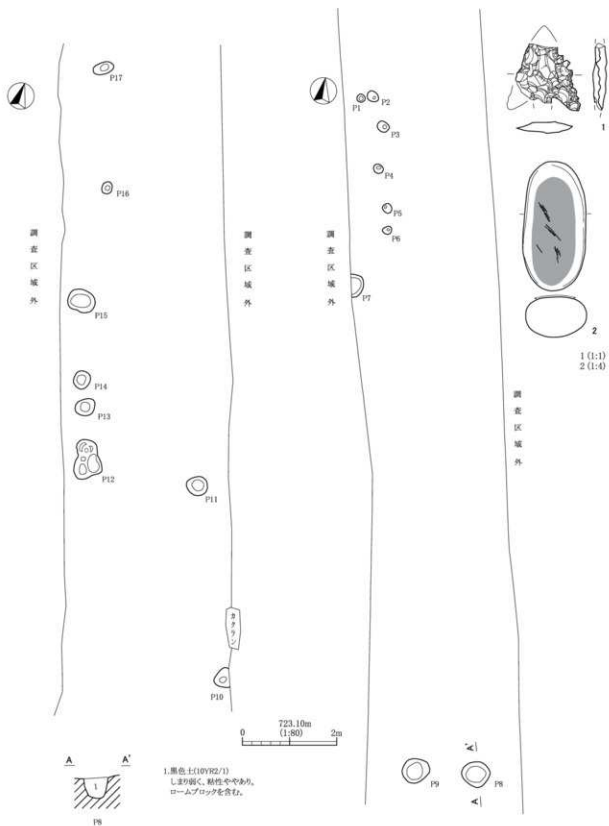
## 第6節 単独ピット

本址からは17ヶ所の単独ピットが調査された。形態・規模は以下の表である。

第2表 ピット計測表

()推定 (単位 m)

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物	土 説	備考
P1	ウ-16	0.16	0.15	0.12	円形		暗褐色土(10YR3/4)	
P2	ウ-16	0.25	0.21	0.28	円形		暗褐色土(10YR3/4) 砂が多い。	
P3	ウ-16	0.26	0.2	0.12	円形		黒褐色土(10YR3/1) 砂が多い。	
P4	ウ-16	0.19	0.19	0.1	円形		暗褐色土(10YR3/4)	
P5	ウ-16	0.21	0.2	0.23	円形		黒褐色土(10YR3/1)	
P6	ウ-16	0.18	0.15	0.16	円形		黒褐色土(10YR3/1)	
P7	ウ-17	0.48	(0.26)	0.14	不明		黒色土(10YR2/1)	
P8	イ-19	0.58	0.54	0.42	円形		黒色土(10YR2/1) ロームブロックが多い。	
P9	イ-19	0.58	0.5	0.41	円形	土師器甕	黒色土(10YR2/1) ロームブロックが多い。	
P10	エ-10	0.4	0.32	0.34	円形		灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性あり。少量の砂を含む。	
P11	エ-9	0.42	0.38	0.34	円形		灰黄褐色土(10YR4/2) ロームが多い。	
P12	オ-9	0.84	0.56	0.44	不整形		灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性あり。少量の砂を含む。	
P13	オ-9	0.46	0.34	0.21	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P14	オ-9	0.38	0.36	0.21	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P15	オ-8	0.58	0.46	0.32	楕円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P16	オ-8	0.26	0.22	0.24	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P17	オ-7	0.44	0.25	0.35	円形	武蔵甕片6点	灰黄褐色土(10YR4/2) ロームが多い。	



第21図 単独ピット及び遺構外出土遺物実測図

第3表 出土遺物観察表1

H1	種別	材質	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		用途(1)・保存(2)・状況(3)	備考	出土位置
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	灰輪	陶	(15.4)	-	(3.4)	コロンナブ	車輪	コロンナブ 車輪	回収美濃	I区
2	須恵器	甕	-	(13.2)	(6.3)	ナブ	ナブ	コロンナブ 底部外周(回転ヘラケツ)	回収美濃	II区
3	須恵器	突帯文付 四耳壺	-	-	(21.7)	丹鳥肌	平打タケ目 突帯貼付	回収美濃	I区・II区	
4	土師器	弁	(13.0)	-	(4.2)	ヘラゴテ	コロンナブ	回収美濃	I区	
5	土師器	弁	(12.0)	-	(3.8)	ヘラゴテ・緑文→黒色処理	コロンナブ	回収美濃	I区・II区	
6	土師器	陶	-	6.5	(2.9)	緑文→黒色処理	コロンナブ→回転ヘラゴテ→高台貼付	完全美濃	II区・検出	
7	土師器	弁	-	5.4	(3.0)	ヘラゴテ→黒色処理	コロンナブ→右回転弁	完全美濃	I区	
8	土師器	弁	-	5.4	(1.1)	ヘラ記号あり	コロンナブ→右回転弁	完全美濃	I区・II区	
9	土師器	陶	-	7.0	(2.2)	ヘラゴテ→黒色処理	高台貼付	完全美濃	II区	
10	灰輪	陶	-	6.0	(1.5)	コロンナブ	車輪	コロンナブ→回転ヘラゴテ→高台貼付	回収美濃	I区
11	土師器	甕	(22.0)	-	(15.8)	ナブ	コロンナブ→下部ヘラケツ	回収美濃	I区・II区・検出	
12	土師器	甕	(18.0)	-	(10.7)	コロンナブ→ヘラナブ	コロンナブ	回収美濃	II区・II区・検出	
13	土師器	甕	(19.4)	-	(13.3)	ヘラナブ	ヘラケツ	回収美濃	I区・II区・検出	
14	土師器	甕	(20.0)	-	(5.1)	ヘラナブ	ヘラケツ	回収美濃	I区・II区	
15	土師器	甕	(15.0)	-	(6.0)	コロンナブ	コロンナブ	回収美濃	II区	
No.	種 類	質 材	最大径	最大幅	最大厚	重 量	用 途			出土位置
16	角釘	鉄製品	(9.2)	0.9	0.9	-	先端鋭欠損			II区
H2	種別	材質	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		用途(1)・保存(2)・状況(3)	備考	出土位置
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	須恵器	弁	(13.0)	6.0	0.9	コロンナブ	コロンナブ	コロンナブ 底部回転弁	回収美濃	-
2	土師器	陶	16.9	8.0	6.5	ヘラゴテ	ヘラゴテ	コロンナブ 底部下縁及び底部(回転ヘラケツ) 高台貼付	完全美濃	-
3	土師器	弁	(13.0)	6.0	4.5	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	回収美濃	-
4	土師器	甕	(16.4)	-	(12.4)	コロンナブ	コロンナブ	回収美濃	-	
H3	種別	材質	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		用途(1)・保存(2)・状況(3)	備考	出土位置
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	須恵器	弁	13.5	5.5	3.6	コロンナブ	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	I区 No.1
2	土師器	弁	-	-	-	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 甕身	破片美濃	II区
3	土師器	弁	-	-	-	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 甕身	破片美濃	II区
4	土師器	弁	(14.0)	-	(3.5)	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 甕身	回収美濃	II区・検出
5	土師器	弁	13.8	5.4	3.8	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	II区
6	土師器	弁	(13.0)	(5.0)	(4.0)	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部回転弁	回収美濃	D1 No.2
7	土師器	弁	12.8	6.3	4.4	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	I区・II区
8	土師器	弁	(13.0)	6.0	4.6	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部ヘラケツ	回収美濃	II区・II区
9	土師器	弁	13.6	5.8	3.6	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 甕身 底部右回転弁	完全美濃	I区
10	土師器	弁	(12.9)	6.0	3.7	ヘラゴテ 緑文 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	II区・検出
11	土師器	陶	-	7.5	(3.9)	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部回転弁 高台貼付	完全美濃	I区・II区
12	土師器	弁	(13.0)	5.4	4.9	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	II区
13	土師器	弁	(14.2)	6.4	5.1	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	回収美濃	II区
14	土師器	陶	(17.1)	-	(6.0)	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部回転弁 高台欠損	回収美濃	D1・I区・供養
15	土師器	弁	(16.4)	6.1	5.6	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	II区・供養
16	土師器	弁	12.9	4.9	4.0	ヘラゴテ 黒色処理	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	II区 No.2
17	土師器	甕	(22.0)	-	(14.2)	ヘラナブ ハタ目	コロンナブ	コロンナブ ハタ目	回収美濃	I区・T1 検出
18	土師器	甕	-	6.0	(11.2)	ヘラナブ	コロンナブ	コロンナブ ハタ目	回収美濃	I区・II区
19	土師器	甕	-	7.1	(6.7)	コロンナブ	コロンナブ	コロンナブ 底部右回転弁	完全美濃	I区・II区
20	土師器	甕	(19.4)	-	(10.0)	ヘラナブ	ヘラケツ	回収美濃	D1	
21	土師器	甕	-	4.5	(9.1)	ヘラナブ	ヘラケツ	完全美濃	I区・II区	
22	土師器	甕	-	0.8	(7.1)	ヘラナブ	ヘラケツ	回収美濃	I区・T1 検出	
23	土師器	甕	-	6.4	(4.0)	コロンナブ	コロンナブ	コロンナブ ヘラケツ	完全美濃	I区・T1 No.5
No.	種 類	質 材	最大径	最大幅	最大厚	重 量	用 途			出土位置
24	鉄製品	鉄釘	9.7	(4.8)	0.4	-	先端鋭欠損			II区
T1	種別	材質	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		用途(1)・保存(2)・状況(3)	備考	出土位置
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	灰輪	陶	(17.0)	(7.2)	(6.3)	コロンナブ	車輪	コロンナブ→回転ヘラゴテ→高台貼付 車輪	回収美濃	検出
2	土師器	陶	-	(7.0)	(3.0)	ヘラゴテ	コロンナブ	コロンナブ→高台貼付	回収美濃	検出
3	土師器	弁	-	(7.2)	(3.3)	ヘラゴテ	コロンナブ	コロンナブ→回転弁	回収美濃	No.1
4	土師器	甕	(12.0)	-	(10.5)	コロンナブ	コロンナブ	回収美濃	No.1 検出	
5	須恵器	甕	-	(16.0)	(16.1)	ナブ	コロンナブ	コロンナブ 底部外周(回転ヘラケツ)	回収美濃	No.2-1ヤケ 検出済み
No.	種 類	質 材	最大径	最大幅	最大厚	重 量	用 途			出土位置
6	磨石	安山岩	15.8	13.8	4.6	1.29kg	正面にすり面			No.0
7	角釘	鉄製品	(2.5)	(0.5)	(0.4)	-	上縁欠損			No.7

第4表 出土遺物観察表2

H5	層別	調査 口徑(長)	遺 蹟			成形・種類・文様		規定値( ) 検出層( ) 丸数(●)	備考	出土位置
			遺径(短)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	東土層	遺	02.4	-	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 自然釉付着		回転実用	H5
2	東土層	杯	03.0	-	12.7	ロクロナデ	ロクロナデ→底部ヘラケズ		回転実用	H5
3	土層	鉢	9.0	-	13.4	ハケ目→ヘラナデ	ヘラナデ		回転実用	H5
4	土層	杯	07.2	10.2	4.6	ヘラナデ→黒色釉施	ヘラナデ→底部ヘラケズ 底部に赤彩の文様		完全実用	H5
5	土層	瓶	-	5.4	13.1	ヘラナデ	ヘラケズ		回転実用	P1
6	土層	壺	-	01.0	17.0	ヘラナデ	ヘラケズ		回転実用	H5-H13検出
7	土層	壺	-	09.0	10.0	ハケ目→ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ→底部		回転実用	H5
8	土層	壺	05.4	-	17.1	ヘラナデ	ヘラケズ→ヘラナデ		回転実用	H5-検出
9	土層	鉢	00.4	6.0	13.0	ヘラナデ→黒色釉施	ヘラケズ		完全実用	H5
10	ヒコテツア土層		00.2	6.7	5.4	ハケ目→ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ		回転実用	H5
No.	層 別	高 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
11	磨石	石	11.5	7.5	3.4	399g	正面上半面 右側に縦行痕		No.2	
12	磨石	石	11.0	4.6	2.8	155g	すり面 3		第2坑 北西方	
13	白玉	滑石	0.7	0.75	0.3	0.2g	孔径 0.35 裏面欠損		H5	
M1	層別	調査 口徑(長)	遺 蹟			成形・種類・文様		規定値( ) 検出層( ) 丸数(●)	備考	出土位置
			遺径(短)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	東土層	杯	14.1	7.6	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部凹陥ヘラケズ		完全実用	M1
2	土層	杯	06.2	06.0	3.5	ヘラナデ	ヘラナデ 底部ヘラケズ→ヘラナデ		回転実用	M1
3	土層	杯	17.3	11.0	4.8	ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ 底部ヘラケズ→ヘラナデ		完全実用	M1
4	土層	杯	04.0	04.0	3.2	ヘラナデ	ヘラナデ 底部にヘラケズ		回転実用	M1
5	土層	杯	16.8	10.3	4.5	ヘラナデ→黒色釉施	ヘラナデ 底部ヘラケズ→ヘラナデ		完全実用	M1
6	土層	杯	07.0	06.0	4.4	ヘラナデ	ヘラナデ 底部ヘラケズ→ヘラナデ		回転実用	M1
7	土層	杯	08.0	06.0	4.1	ヘラナデ→黒色釉施	ヘラナデ		回転実用	M1
8	土層	杯	16.2	10.3	4.6	ヘラナデ→黒色釉施	ヘラナデ 底部ヘラケズ→ヘラナデ		完全実用	M1
9	土層	壺	-	9.8	12.0	ハケ目	ハケ目→ヘラナデ		完全実用	M1
10	土層	壺	04.0	05.0	12.1	ナデ 黒色釉施	ヘラケズ→ヘラナデ		完全実用	M1
11	土層	壺	03.0	6.5	15.0	ヘラナデ	ヘラナデ 底部外周ヘラケズ		完全実用	M1
12	土層	壺	03.0	-	11.0	ハケ目	ヘラケズ		回転実用	M1
13	土層	壺	09.0	-	13.3	ヘラナデ	ヘラケズ		回転実用	M1
14	土層	壺	01.4	-	16.1	ヘラナデ→ヘラナデ	ヘラケズ		回転実用	M1
15	土層	壺	06.4	-	15.3	ハケ目→ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ		回転実用	M1
16	土層	壺	-	09.0	14.0	ヘラナデ	ヘラケズ→ヘラナデ		完全実用	M1
17	土層	壺	07.0	-	10.0	ヘラナデ	ヘラナデ		完全実用	M1
No.	層 別	高 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
18	磨石	石	8.9	5.3	4.7	393g	全体に滑り心		M1	
19	磨石	礫石	6.3	6.3	5.1	99g	右側にV字状の溝痕 ケズ状の磨痕のある 全体にすり		M1	
遺構内出土遺物										
No.	層 別	高 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
1	石蔵	黒曜石	11.0	11.7	0.3	0.8g	小先端、片割、基部欠損 断面状		試験	
2	磨石	石	13.7	6.7	4.5	624g	正面上半面		検出	

## 第V章 調査のまとめ

今回の調査成果としては、まず第1点目として、台地内部にまで集落が広がっているが散村的な状況であることが確認されたことである。長土遺跡跡群は国道より東側の台地で聖原遺跡や上聖端遺跡などの調査事例から、台地全面に古墳時代後期から平安時代の集落が展開していることが確認されている。しかし、国道141号の調査では台地全体には集落が広がらず、散村的な集落状況を示し始めていた。今回の調査でもこの事が確認された。また、今回の調査地点から100m程北側の試掘結果でも古代の集落は確認されておらず、今回の調査地点付近から北側の台地には集落が展開しない可能性が指摘できる。

第2点目の成果としては、標準土層の項でも述べたが、調査区周辺に広がる砂層の形成時期についてである。今回の調査成果では9世紀後半～10世紀前半のH1号住居がこの砂層を切り込む状態で構築され、これとは逆に、6世紀後半のH5住居やM1号溝状遺構などは砂層に覆われた状態で検出されている。これらの事から、これら砂層が同一時期の一度の堆積によるものかは検証できていないが、6世紀後半以降から10世紀前半代までに形成されたであろうことが推定できた。今後は形成時期の確定や、その広がり等を検証し、いわゆる「仁和の大洪水」も含め、自然災害の認識や遺構の時期確定に資する資料としていくことが課題である。





遺跡周辺写真(平成6年 株式会社こうそく撮影)



北側調査区全景(北より)



南側調査区全景(北より)



H1号住居址



H1号住居址掘方



H1号住居址カマド



H1号住居址掘方



H2号住居址



H2号住居址掘方



H3号住居址



H3号住居址掘方



H3号住居址カマド



H3号住居址出土鉄製品



H5号住居址



H5号住居址第2床面



H5号住居址掘方



H5号住居址覆土堆積状況



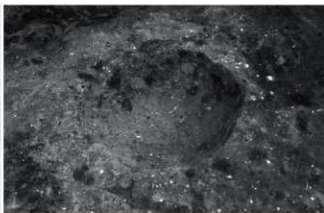
H6号住居址



H6号住居址掘方



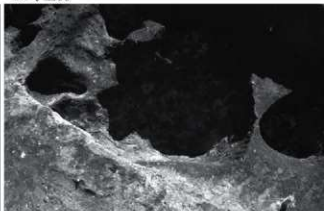
F1号掘立柱建物址



D1号土坑



D2号土坑



D3号土坑



T1号特殊遺構焼土檢出狀況



T1号特殊遺構細方



M2号溝状遺構



M3.4号溝状遺構

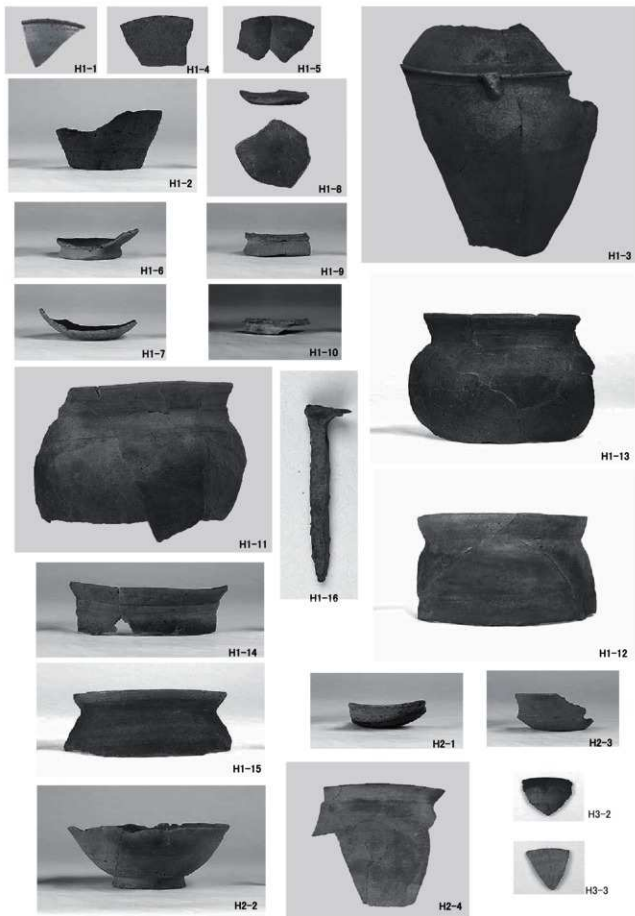


M1号溝状遺構



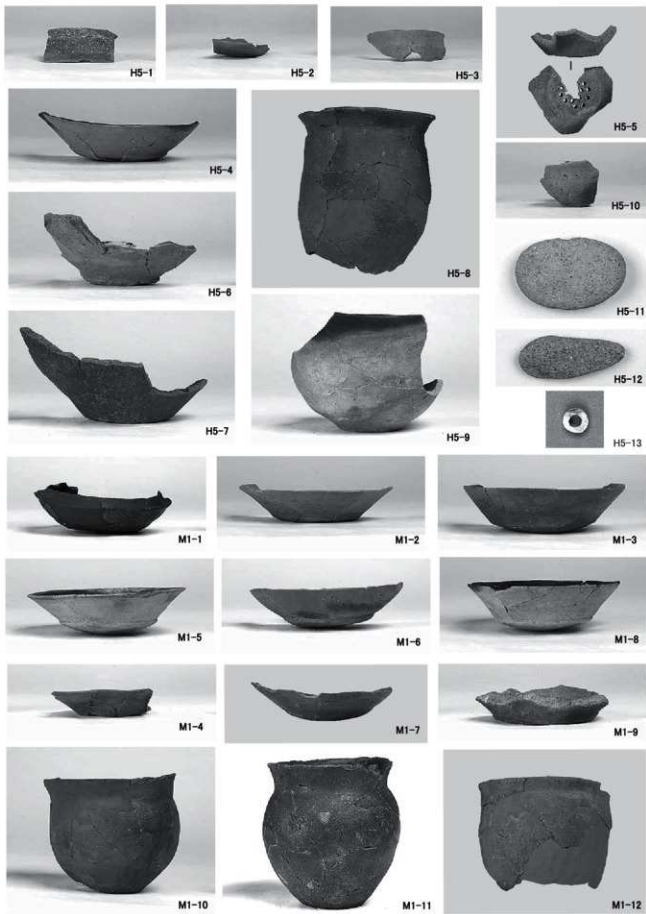
M1号溝状遺構覆土堆積状況

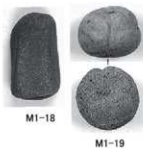












---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第237集  
長土呂遺跡群 下聖端遺跡V  
平成28年(2016) 3月  
編集・発行 佐久市教育委員会  
〒385-8501 長野県佐久市中込3056  
文化振興課 文化財事務所  
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953  
☎0267-68-7321  
印刷所 キクハラインク有限公司

---

## 報告書抄録

ふりがな	ながとろいせきぐん しもひじりばたいせきご							
書名	長土呂遺跡群 下聖端遺跡V							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第237集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市志賀5953 TEL0267-68-7321 FAX0267-68-7323							
発行年月日	平成28年(2016)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながとろいせきぐん しもひじりばた いせきご  長土呂遺跡群 下聖端遺跡V	さくしながとろ  佐久市長土呂 512 外	20217	9	36° 17.00	138° 28.21	20150824 ～ 20150925	277	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長土呂遺跡群 下聖端遺跡V	集落址	古墳 平安	住居址 5軒 独立柱建物址1棟 土坑 3基 溝状遺構 4本 特殊遺構 1基	土師器・須恵器 石器・鉄製品				
要 約	台地上に展開する古墳時代と平安時代集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に調査地点は砂が堆積している部分があり、この砂の堆積層を切り込む形で平安時代の竪穴住居は構築され、古墳時代の竪穴住居はこの砂層に覆われている事が確認できた。							